

## 稲武地域の養蚕業と大嘗祭繪服（にぎたえ）調進について

このたびは、今上上皇陛下の大嘗祭に続いて今上天皇陛下の大嘗祭繪服調進の御下命を承る光栄に浴しました。以下の通り、稲武地域の養蚕業と大嘗祭繪服調進の概要、そして古橋家と一般財団法人古橋会の概要を取りまとめました。ご参考になれば幸いです。

先人や地域社会の皆さまのご尽力に感謝するとともに、伝統と技能を後世に継承する重みを一層感じる機会となりました。令和の時代が素晴らしいものになることを祈念申し上げます。

### 1. 稲武地域の養蚕

古くから三河地方は気候風土が養蚕に適しており、三河国の「赤引糸」として古来より御料糸に用いられてきた。明治 7 年（1874）に、稲武町（平成 17 年豊田市に合併）の古橋家六代当主の古橋源六郎暉兒（てるのり）は、平田門の国学者の羽田野敬雄（「三河蚕糸考」の著者）から、102 代後花園天皇（室町時代）以来途絶えていた伊勢神宮献糸の古典復興を勧められる。当時は殖産興業の時代で、暉兒は桑苗を稲武地域の各村に配布して養蚕業を奨励した。

それ以来、稲武では養蚕が盛んになり、最盛期では稲武地域全体で養蚕農家が 400 軒ほどあったと言われている。しかし、昭和 40 年代あたりから稲武の養蚕農家は減少し、令和元年（2019）の今日、稲武に養蚕農家は無く、有志団体「まゆっこクラブ」と（一財）古橋会が、桑畑の整備、蚕の飼育、糸取りなどの技能継承や、伝統文化の継承に取り組んでいる。

### 2. 伊勢神宮献糸と献糸会

羽田野敬雄から伊勢神宮献糸の古典復興を勧められた古橋源六郎暉兒は、明治 13 年（1880）に「伊勢神宮神御衣（かんみそ）祭糸献納願」を愛知県令と伊勢神宮司庁に提出した。伊勢神宮司庁は内務省とも協議し、明治 14 年（1881）5 月 30 日付をもって正式認可となった。稲武地域では同年 7 月に献糸会を創設した。明治 15 年（1882）に献糸会として最初の献糸を行い、令和元年（2019）の今日まで 1 年も途切れること無く続いている。

稲武町が豊田市に合併するまでは、伊勢神宮献糸事業は町役場が運営を行っていたが、平成 17 年（2005）に豊田市に合併されると、豊田市役所には献糸事業や養蚕の伝統技能継承事業が引き継がれなかったため、現在は「まゆっこクラブ」と地域と（一財）古橋会が協力して継続している。

### 3. これまでの大嘗祭繪服調進

天皇が即位の礼の後に初めて行う新嘗祭を特別に大嘗祭という。この大嘗祭で重要な役割を担う「繪服」（にぎたえ。絹織物）は三河・稲武から調進することになっている。大正の大嘗祭では、稲武で御料繭を作り、岡崎市の(株)三龍社で繰糸機織りされた。昭和の大嘗祭では、(株)三龍社が単独で繪服を調進し、今上上皇陛下（平成）の大嘗祭では、稲武が単独で、稲武町役場が中心となって繪服を調進した。

### 4. 今上天皇陛下（令和）の大嘗祭繪服調進

（一財）古橋会とまゆっこクラブは、前年の平成 30 年（2018）から繪服調進に向けて特別態勢を敷いた。稲武地域では稲武地域大嘗祭繪服調進特別委員会を結成し、まゆっこクラブが養蚕作業を実施し、（一財）古橋会が事務や資金を支援して、地域をあげて取り組むこととした。

繪服は幅 1 尺、長さ 5 丈（鯨尺）の巻物 2 本（4 匹分）からなる絹織物。万が一に備えて予備分も作成した。令和元年 10 月 2 日に出発祭を斎行し、翌日の 10 月 3 日に上納した。

## ご参考写真

今なお、手作業にて毎年約1万頭の蚕を飼育し、明治期からの古式の糸取り道具にて繰糸しています。



まゆっこクラブの皆さん



まゆっこクラブ代表の金田平重氏



まゆっこクラブによる桑畑整備



毎年稲武小学校2年生は蚕飼育を体験



毎年の伊勢神宮献糸



令和大嘗祭の繪服出発祭（令和元年10月2日）



令和大嘗祭の繪服上納 宮内庁舎前  
（令和元年10月3日）



大村秀章知事表敬訪問  
（令和元年10月10日）

## 古橋家と一般財団法人古橋会の概要

### 1. 豊田市稲武の古橋家

愛知県豊田市の稲武町（平成 17 年豊田市に合併）を拠点とする豪農古橋家は、享保 2 年（1717）に岐阜県中津川から初代古橋源六郎義次が稲武町に移住をして、酒造業をはじめたことが起源となっている。源六郎は、代々当主の襲名である。

酒造業以外にも、味噌醸造や金融業などを営み、地域の名望家として村政にも関わってきた。古橋家中興の祖と言われる六代当主の古橋源六郎暉兒（てるのり）は、平成 26 年（2014）の第 187 回国会における安倍首相の所信表明演説にも紹介され、幕末から明治維新の時代に、天保の飢饉の救済に奔走し、地域に林業を奨励し、養蚕業などの殖産興業を促し、明月清風校という私学校を建設し、農談会を創始するなど、「富家より富村」「共存共栄」という家訓を実践した。

その後、七代当主の古橋源六郎義真も暉兒の事業を継承して、農談会を農会へと発展させ、産馬事業を奨励し、稲橋銀行を創設した。

### 2. 財団法人古橋会

太平洋戦争終戦直後の昭和 21 年（1946）、八代当主の古橋源六郎道紀が亡くなり、古橋家の資産の大半を遺贈して財団法人古橋会が設立された。戦後の混迷期にあつて、戦後の 15 年間ほどは、稲武町役場の予算に古橋会の予算が匹敵する規模で行政活動を補完した。以下に一部を抜粋する。

- ・昭和 23 年（1948）から、奨学施設義真会館を名古屋市内に建設し、奥三河の子弟の下宿先として提供。
- ・昭和 26 年（1951）から、鶴望保育園という保育園を大井平公園に建設開園。
- ・昭和 28 年（1953）から、古橋家旧酒蔵を改築した総合病院（内科、外科、産婦人科）を開業。
- ・昭和 41 年（1966）から、古橋家の所蔵していた幕末維新の志士達の書画や古文書等を展示する古橋懐古館という歴史民俗資料館を一般公開。

このほか、名古屋大学演習林の誘致や産業誘致、家政塾の運営などに尽力した。

また、所蔵する史料は、古文書だけで約 2 万 5 千点あり、書簡手紙、書画骨董、民具民俗史料を合わせると膨大な量になる。昭和 36 年（1961）から古橋家文書研究会という芳賀登（元筑波大学副学長）を中心とした研究グループが発足し、以来 50 年にわたり稲武の古橋家の古文書の整理や目録編集、調査研究を行ってきた。平成 29 年（2017）には新しい収蔵庫を建設し、健全な保存環境を整備した。

### 3. 近年の一般財団法人古橋会の運営

戦後の財団法人古橋会の主要な収益事業は林業で、明治期を中心に植林した山林の管理と活用を行ってきた。林業経営が厳しくなってからは、上記のような公益的事業を公的資金に頼らずに維持するのは難しく、各事業は現在以下の通りとなっている。

- ・奨学施設は、売却のうえで、売却資金を原資として稲武中学校卒業生への給付型奨学金を実施（愛知県立田口高校稲武分校の廃校以後の平成 20 年から 10 年間は全員対象）。現在も規模を縮小して継続中。
- ・保育園は移転のうえで町営移行。
- ・総合病院は閉鎖し、別に古橋クリニックという診療所を建設。
- ・古橋懐古館は平成 30 年（2018）12 月から無期限休館中で、所蔵史料の整理と活用に注力。

平成 24 年（2012）から、一般財団法人への移行法人となっている。現経営陣は、代表理事は古橋敬義（九代古橋源六郎の長男）、常務理事は古橋真人（本資料作成、2017 年初より稲武在住）で、地域と（一財）古橋会が共に持続可能に栄えられるよう、事業を展開している。